



アナフィラキシーおよび アナフィラキシー様反応の予防

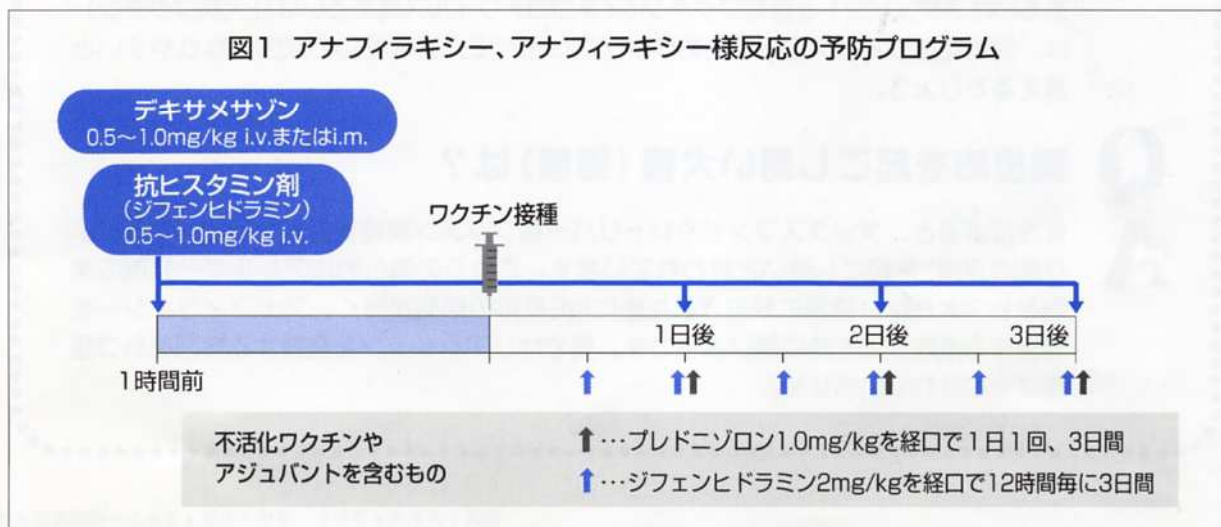
ワクチン接種後のアナフィラキシーやアナフィラキシー様反応の発現を予測することは大変困難です。しかし、再発を防ぐことは出来ます。

ワクチン接種の後、どの動物がアナフィラキシーやアナフィラキシー様反応を発現するかを獣医師が予測することは大変困難です。しかし、一旦動物がアナフィラキシーやアナフィラキシー様反応を示した場合、その後の再発を防ぐための手段は数多くあります。例えば図1に記載されている方法で予防することによって、再発の危険を低下させることが出来ます。

1. ワクチン接種の前に、ステロイド剤と抗ヒスタミン剤を投与します。

これらの薬物は肥満細胞の脱顆粒を防ぐことは出来ませんが、ヒスタミンの生理活性を鎮めることは出来ます。短期間のステロイド療法で、ワクチン接種への免疫応答に影響することはありません。研究によれば、ワクチン接種の前にデキサメサゾンで予防したイヌと予防しないイヌを比較すると、ワクチン接種への免疫応答に差がないことが示されています。デキサメサゾンは0.5~1.0mg/kg i.v.またはi.m.で、抗ヒスタミン剤(ジフェンヒドラミン)は0.5~1.0mg/kg i.v.の用量で投与します。どちらもワクチン接種の1時間前に投与し、ワクチン接種後は2、3日経口で投与します。特に、不活化ワクチンやアジュバントを含むものは、プレドニゾロン1.0mg/kgを経口で1日1回、必要に応じて3日間、ジフェンヒドラミン2mg/kgを経口で12時間毎に3日間投与します。ネコで最も一般的に使用されている抗ヒスタミン剤は、クロルフェニラミン(用量は2.0mg/kg、12時間毎)です。

図1 アナフィラキシー、アナフィラキシー様反応の予防プログラム



2. 副反応に関連していると思われる抗原を接種してはいけません。

一般的にワクチン副反応を起こしやすいのは、アジュバントを使った不活化ワクチンです。副反応を起こしやすい抗原は、イヌではレプトスピラ属、イヌコロナウイルス属、ボルデテラ属、狂犬病ワクチンなどで、ネコでは、白血病や狂犬病ワクチンです。

ワクチン接種からこれらの抗原を省いて良いかどうかは、感染のリスクと背中合わせになりますから、感染の危険を常に考慮に入れておく必要があります（例、狂犬病ワクチン）。

副反応を起こしやすい抗原



イヌ

レプトスピラ属
イヌコロナウイルス属
ボルデテラ属
狂犬病ワクチン



ネコ

白血病
狂犬病ワクチン

アナフィラキシーとアナフィラキシー様反応

Q&A

Q アナフィラキシーとアナフィラキシー様反応の原因は何？

A ほとんどの場合、ワクチンのどの成分も原因になりえます。ワクチンはウイルス及び菌の抗原やアジュバントに加えて、わずかですが抗生物質・ゼラチン・ウシ血清アルブミン・組織培養の細胞壊死片などを含んでおり、これらすべてがアナフィラキシーとアナフィラキシー様反応に関係しているからです。したがって原因成分を特定するのは大変困難です。しかし一般的に、バクテリアを含むワクチン（例、レプトスピラ属）、あるいはアジュバントを含むワクチン（イヌコロナウイルス属あるいは狂犬病ワクチン）は、弱毒化生ウイルスのみを含むワクチンに比べて、過敏反応の原因となりやすいと言えるでしょう。

Q 副反応を起こし易い犬種（猫種）は？

A 報告によると、ダックスフンドやレトリバーはワクチン接種後に局所反応（発疹および顔面浮腫）を起こし易いと言われていています。これらの遺伝的にアレルギー発現の素因をもつ犬種は、抗原に暴露された後にIgE反応の傾向が強く、アナフィラキシーを発現する危険が潜在的に高いようです。猫ではリアクションを発現する素因をもつ猫種は特定されていません。

出典：アナフィラキシー及びアナフィラキシー様反応のメカニズム
Michael J. Coyne, VMD, PhD Pfizer Inc.



ファイザー製薬株式会社

東京都新宿区西新宿 2-1-1 〒163-0461
TEL: 03(3344)7422 / FAX: 03(3348)5076